容もより農民志向的で政治闘争的なものに変わっていった[23]。青年会革新運動以後、次第に地方政治でも内部分裂や対立が深刻になり、それに伴い初期の青年運動や小作人組合運動を進めてきた青年有力者の内部でも政治・思想的な亀裂が深まっていった。この過程において大地主も紛争に巻き込まれ、新聞紙上で公然と「悪徳地主」と非難されるものが多く現れる。実際に羅州でも悪徳地主の横暴を非難する新聞記事が相次いで現れた。『毎日申報』や『東亜日報』によると、羅州の伝統的な郷吏家であった済州梁氏の梁錫煥や金海金氏の金容圭が地税や公課金を小作人に催促するなど、悪徳地主として横暴を繰り返していたという。また、日帝下の羅州地方における最大の朝鮮人地主であった許栄奎も 1922 年 8 月と 1928 年 1 月、そして 1930 年 6 月にも悪徳地主として新聞に報道された[24]。郷吏ではなかった許栄奎の頤老会加入もそのためであったと思われる。

羅州でも革新青年が進歩的社会運動を展開した。1925 年 2 月 11 日に暁鐘団[25]が創立され、羅州労農共栄会では臨時総会を開催して当初の会長制を議員制にかえる決議などを行っている[26]。また、羅州労動組合連盟と羅州農民組合連盟は同年の 2 月 20 日に懇談会を開催し、両組織の統合に向けた羅州協会創立準備委員を選出した[27]。彼ら革新青年たちが羅州社会運動を主導していた主要勢力であったことは、羅州関連の新聞資料に掲載された彼らの活動の姿からもうかがえる。

このような背景の下、羅州頤老会は結成された。結局、羅州頤老会は、羅州地域の郷吏層を中心とした社会的主導権を持つ層が、革新青年の積極的な地域社会活動に対応しながら、自分たちの社会・経済的基盤を守るために組織したものだったといえる。

### （2）郷吏家門出身の有力者の活動

羅州地域の地方有力者は植民地権力が要求する媒介者としての役割を果たすと同時に、地域民のための社会活動も行っていた。地域における存立基盤のためにも地域民の要求を受け入れる努力をおろそかにはできなかったのである。1920 年の羅州青年修養会、1922 年の羅州青年会、1923 年の民立大学羅州郡地方部、1926 年 2 月に開催された羅州市民大会で組織された実業学校期成会、1927 年の羅州青年同盟、1927 年の羅州女子青年会、1927 年 12 月の新幹会羅州支部など、各種社会団体が創立される過程[28]において郷吏家門の

---

23 김익한「일제하 한국 농촌사회운동과 지역 명망가」（『한국문화』17、1996）312 頁参照。青年会の革新運動については韓国歴史研究会近現代青年運動史研究班『한국근현대 청년운동사』（풀빛、1995）20 ～ 50 頁参照。

24 『東亜日報』1922 年 8 月 14 日付；『朝鮮日報』1928 年 1 月 22 日付；『東亜日報』1930 年 6 月 15 日付参照。

25 박찬승「일제하 나주지역의 민족운동과 사회운동」『한국근현대지역운동사』2（여강출판사、1993）227 ～ 228 頁参照。

26 『東亜日報』1925 年 2 月 11 日付。

27 『朝鮮日報』1925 年 2 月 20 日付。

28 韓末日帝時期の羅州地域の社会運動については次の論文参照。박찬승「일제하 나주지역의 민족운동과 사회운동」『한국근현대지역운동사』2（여강출판사、1993）；박찬승「해방 전후 나주지방의 정치사회적 동향」『지방사와 지방문화』1（역사문화학회、1998）；박찬승「11.3 학생독립운동과 나주」『광주학생독립운동과 나주』（경인문화사、2001）。

出身者は積極的に参与した。

さまざまな郷吏家門のうち、日帝下における妥協と拮抗の二重性を体現する家門は密陽朴氏家である。朴氏家は伝統的な郷吏家門のほとんどと通婚しただけでなく、士族とも縁類関係にあった[29]。植民地権力が要求する媒介者の役割や地域民のために社会活動も他の郷吏家門出身の有力者とともに担うなど、朴氏家は羅州地域の地方有力者のあり方を示す代表的な事例である[30]。

まず朴贊郁は 1894 年に羅州守城や 1896 年の羅州義兵に参加した人物である。そして密陽朴氏家の代表的な人物として朴在求（朴在秤）がいる。彼は羅州守城の功によって参奉に取り立てられ、1897 年に宮内府主事、1907 年に羅州地方委員、1908 年に長興郡守、1910 年には谷城郡守を歴任した人物である。彼の息子である朴正業は日帝下の羅州の大地主で、1920 年に羅州公立普通学校の学務委員、羅州面協議会員、羅州金融組合評議員、羅州郡学校評議会員を務めた。1922 年 5 月に羅州錦明学院の創立を発起して義捐金を出し、6 月には羅州青年会館の落成式で賛助金を出した地方有力者であった[31]。同年の 9 月には羅州青年会の第 3 回定期総会において副会長に選出された[32]。1923 年 5 月の羅州金融組合の第 4 回定期総会においては評議員に選出された[33]。1923 年 12 月の民立大学の羅州地方部委員会では会金保管委員を務めた[34]。1924 年 8 月には全南羅州郡の登記所建設委員会の委員長にも選ばれた[35]。1929 年 5 月には全南羅州金融組合の監査役となっている[36]。

なお、朴正業の息子である朴準三は羅州地域の社会運動を主導した代表的な人物であった。朴準三は、中央学校の在学中、三・一運動に参加したために退学処分を受けた。また、日本の立教大学の英文科を中退した。1926 年に羅州青年会会長、1927 年に羅州青年同盟の執行委員長、1927 年 9 月には新幹会の羅州支会の常務幹事などを務めている。1928 年 1 月に拘束され、光州地方法院から懲役 6 カ月執行猶予 5 年を宣告されたが、1929 年 5 月に大邱覆審裁判所から無罪判決を言い渡された。1929 年 8 月に新幹会羅州支会の執行委員（調査部長）となり、1930 年代には羅州協同商会の第 2 代常務理事を歴任した。『朝鮮日報』の地域事業部長も務めている[37]。

それだけではなく、朴正業の末息子の朴準埰は、光州学生運動の導火線になった羅州駅の衝突事件の主役であった。彼も日本留学の経験がある。その他にも、社会活動に参加した朴氏家の人物には、光州学生事件に加担して懲役になった朴東熙、青年修養会の活動に参加した朴鳳儀・朴鳳暎・朴鳳柱兄弟、羅州金融組合に朴正業とともに参与した朴完根、新幹会の役員として朴準三とともに活動した朴鳳德、羅州万歳学生示威運動に参与した朴

29 『密陽朴氏清齋公派家乗譜』;『密陽朴氏家乗』;『密陽朴氏世系』などを参照。
30 박진철、前掲書（2003）参照。
31 『東亜日報』1922 年 5 月 31 日、6 月 27 日付。
32 『東亜日報』1922 年 9 月 28 日。
33 『東亜日報』1923 年 5 月 11 日。
34 『東亜日報』1923 年 12 月 13 日。
35 『東亜日報』1924 年 8 月 10 日。
36 『中外日報』1929 年 5 月 3 日。
37 박경중証言、2003 年 2 月 10 日。

春根などがいた。

このような朴氏家による社会活動の中で、特に注目すべきは彼らの言論活動である。1920年代に誕生した民族系新聞の配布網は社会の主要情報を収集して配信する主なルートとして、時には主要運動組織として機能する面をもっていた[38]。朴準三らは言論活動を通して中央とのネットワークも形成していた。ところが、1930年代以後、一部の人物による親日的活動以外、目立った活動が見られなくなる。1930年代に入り、羅州地主の所有する土地の規模が平均30町歩以下に縮小した事情とも無縁ではなかったように思われる。朴氏家の場合も債務状況が悪化したことにより、1930年代に入ると大規模に土地を売り出した。

しかし、彼らの社会的ネットワークは解放以後も持続し、朝鮮戦争のように極端な理念が対立する過程においても犠牲者をほとんど出さなかった。彼らが韓末以来構築してきた社会的ネットワーク、植民地権力に対する妥協とともに見せた民族主義的な傾向によって地域民から「社会的人望」を獲得することに成功し、結果としてそれが理念の衝突を相対的に宥和させたのである。

## 結論

開港以後、社会的な変動が生じる中、地方の事情に通じた郷吏集団は、地主経営や商業活動を通じて蓄財した。伝統的な方法を用いて財をなす一方で、人民の抵抗にあって危機的な状況に置かれもした。しかし、彼らは農民戦争における守城、義兵活動によってこの危機を克服した。郷吏集団は内部に緊密なネットワークを形成し、地域民からも「人望」を勝ち得た。日帝下においても羅州頤老会のような組織を通して相互連携し、紐帯を維持しながら「地方有力者」になった。1920年代まで羅州の地主比率は全羅道平均より低いのに対して、小作地の比率は全羅道平均より高かった。これは羅州に大地主が多数存在していたことを示している。日帝下で活動した郷吏家門出身者も大地主であった。このような経済力をもとに社会活動を展開し、その過程を通して韓末に形成した社会的ネットワーク（social network）をさらに活用・強化した。

植民地権力と地域民の媒介者として植民地権力に妥協はしたが、市民大会、期成会などで地域民の要求を受け入れた。また、政治色の薄い教育運動には積極的に参加した。彼ら地方有力者は近代を受け入れる過程の中で中間者の役割を担っていた。身分的にも中間階級であった彼らは、士族勢力よりも近代を受け入れるのに比較的積極的であり、「儒教的教義の典範性」を守ろうとした士族[39]よりは近代の受容において相対的に自由であり、植民地支配下においても妥協と拮抗の構造にも無理なく適応できたのである。

（原文：韓国語、日本語訳：金炳辰）

38　정근식「한말・일제하 전남의 社會　경제――民族運動의 기반」（『전남사학』9、1995）356頁。
39　前掲『한말 일제하 나주지역의 사회변동연구』2008の中、한영규の論文参照。